ポケットの穴

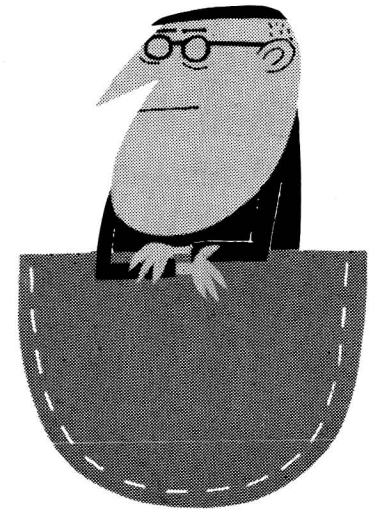
男性自身・第二部

山口 瞳

ポケットの穴

男性自身・第二部

山口 瞳



新潮社

ポケットの穴
—男性自身第二部—
昭和四十一年四月二十五日　印刷
昭和四十一年四月三十日　発行
定価　三三〇円
著者　山口瞳
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)二二番(大代)
振替東京八〇八番
乱丁・落丁のものはお取替えいたします。
印刷・二光印刷株式会社　製本・新宿加藤製本所
© H. Yamaguchi　Printed in Japan

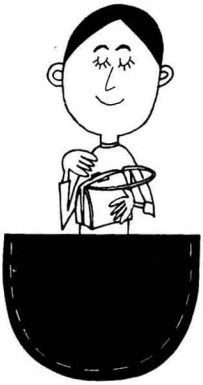
目

次

ポケットの穴　九
わたくしの母　一四
悪い鶏　一九
叔母の決心　二四
いたずら　二九
ヌード　三四
バンザイ屋　三九
ウイスキー　四四
夫婦喧嘩　四九
逃げる　五四

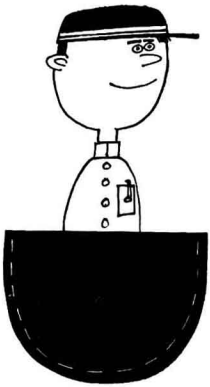
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

部屋のなかの家　五九
芸は身を助く　六四
食　通　六九
酒飲みの休日　七四
さ　ぶ　七九
わが恋せし少女　八四
猿蟹合戦　八九
私の小学校　九四
生活の工夫　九九
鳥たち　一〇四



危険な私　一〇九
コマーシャル　一一四
分　家　一一九
痛恨事　一二四
海　一二九
夜中の対話　一三四
競　馬　一三九
お婆さん　一四四
白河夜船　一四九
職人気質　一五四

手順前後　一五九
ハヤシライス　一六四
藪の中　一六九
走者一、二塁　一七四
今年の海　一七九
女の子　一八四
秋　一八九
ある復讐　一九四
青空の下　一九九
美人　二〇四



教育　二〇九
潮来笠　二一四
人生色眼鏡　二一九
平川クン　二二四
私は背番号60　二二九
薔薇の運命　二三四
地下鉄四谷駅　二三九
満身創痍　二四四
一族　二四九
女嫌い　二五四

ポケットの穴

—男性自身第二部—

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

ポケットの穴

若いときに結婚したせいかどうかはわからないけれど、女とは女房とはこういうものかと奇異に感じたことがすくなくない。

「オミナとはかかるものかも春の夜」といったようなイキな話ではない。

おそらく、普通に結婚した男なら、誰でもそういう経験をもっているだろうと思う。なんだこんなものか。ちぇっ、こんな奴か。こんなことがわからないのか。どうして俺(おれ)を理解してくれないのか。

それは十年ぐらい続くだろうと思われる。あるいは一生つづいてしまうかもしれない。それが当然だろう。はじめっから女や女房のすべてを理解しているような男は、むしろ信用できないような気がする。

＊　＊

はじめに驚いたのは、というよりは違和感を感じたのは、私の古くなって駄目になったズボンを他の人にやってしまうということであった。この他の人というのが、私のほうの親戚の青年たちであったりするから、そのことに優しさとあたたかさと心づかいを感じたのであるが、同時にそれは

私にとって困ることでもあった。特に衣類の欠乏していた時代だったからというのではない。

男というものは、休日には、汚ないズボンをはいて、暑いときならランニング・シャツ一枚で寝ころんでいたいものである。それは、古くなって汚れていて駄目になったヤツでないといけない。芝生のうえでも寝ころぶからというのではなくて、そうでないと心がやすまらないのである。（私には、休日に丹前を着て過すという趣味がない。あれはよくない趣味だよ。私はいまクツロイデイマスという感じがよろしくない。いまの若いサラリーマンでいうならば、ふだんの日には和服を着ないだろう。休日に和服を着るというときは、別の気分になってしまう。あれはどう考えてもおかしい。もし丹前を着るならば、長火鉢に長煙管でやってもらいたい。幡随院長兵衛みたいな派手な丹前を着て巻煙草にガスライターでウイスキーを飲んでいるのは、どうにも私には納得がいかない。和服を着なれないから、女房にお仕着せをいただいて喜んでいる図にしか見えない。丹前を着てよいのは社員旅行の宴会だけと心得べし。もっとも私はそのときでも別のズボンとスウェーターを用意してゆくが）

どうしてそういうことがわからないのか、と思ったものだ。

「だって、あなたには、新しい普段着のズボンを買ったわよ」という。

そうではない。会社へ着てゆく仕事着としての背広には違和感があっても仕方がないのだ。しかし、休日に寝ころぶための衣服は抵抗を感じさせない〝馴れ〟が必要なのだ。新しく買った普段ばきのスポーティなズボンというのでは丹前と同じことになってしまう。そうなると、私には鳥打帽と赤いマフラーと黄色のシャツとパイプとゴルフ用具と葡萄酒が必要になってしまう。それは御免だ。

私が休日のためのズボンとしてそいつを許せるようになるには三年ぐらいかかってしまう。馴れるということが必要なのだ。しかし、いまや、そのことに関しては徹底した。いま私がはいているのは十年前にアメ屋横町で買った米軍将校のズボンだし、黒のスウェーターは、それよりも古い。(どうして昔ふうのウドンのように太い毛糸がなくなったのかな)もしこれを勝手に処分するようであれば離縁しよう。

つぎに、いくら頼んでもズボンのポケットにあいた小さな穴を縫ってくれない、ということがあった。私の女房は、銀座の洋裁店で二年半ばかり御針をやった女である。背広でもオーバーでも、古くなると裏返しに仕立てなおすという技術をもっていた。どういうものかポケットの穴を修理してくれない。

その穴は、いまの百円玉が落ちるか落ちないかという程度の小さな穴だった。そのズボンに毎朝アイロンをかけ、裾のほころびなんかは縫ってくれるのに。

仕事着のポケットに穴があいているということが、サラリーマンにとっていかに不安なものであるかを理解してくれない。そこへ重役からことづかったメモを押しこむということがある。電車賃に残した小銭をいれることがある。どうして女房は外見だけを重視するのか。はたらきに出る夫と、家にいる女のちがいは、このポケットの穴に対する感覚の相違ではなかろうか。長い間、私はそう思いつづけていた。しかしまた、電話を受け、メモをとり、重役室に飛んで行き、伝票を書き、来客に接し、書類に目を通し、報告書を書き、そのあいだにプランをたて、商売をするということを女房が本当に理解するのは不可能であるとも思ったものだ。

仕事を終って、ズボンに手を突っ込んで、右手の人指しユビがもぐってしまうときに、私は仕方

がないと思い、また、ちぇっと舌打ちをしたものだ。
酒のことでいうと、猪口が欠けたり割れたりしても補充してくれない。三十円あれば、かなりのものが買えたのに。
私が女房を叱ったことは、いままでに一度しかない。それはウイスキーの水割りを私の象牙の箸でステアー（攪拌）したからだ。会社から帰ってきて飲む最初の一杯は、私にとっては苦いものであり、かつ神聖なものであったからだ。マドラーを買ってこない私がわるいのだが。

＊　＊

昨年、私は事情があって、三ヵ月間休職した。ほとんど家にいた。社宅である。
結婚して十年以上も経って、私はサラリーマンの女房というものが容易ではないことをはじめて悟った。
その一例。
某々クリーニング店の御用聞きを、憎らしい奴だという。イマイマシイという。
なぜかというと、
「アタシが御不浄へはいると、必ずアイツがやってくる」
どういうものか、本当にその店の小僧はその時間にやってきた。
昔の日本建築であるならば便所は概して床の間の裏にあったようだ。いまの小住宅やアパートでは玄関脇が汽車式の一穴便所になっている。ブザーを押して返答がなければ帰るという相手ではない。十二軒の社宅のうち、私の所にだけ会社が電話をひいてくれたので、みんなの便宜のために、玄関はいつも明けはなしにしてあった。そこに受話器がとりつけてある。

御用聞きなどは適当にあしらえばよい、と思うかもしれないが、原則として近所づきあいをしない社宅では、これが意外なハタラキをするのである。

大森さんのテレビは中古品を買ったものであるとか、鶴見さんの奥さんは悪阻であるとか、品川さんは留守勝ちだとかを、サービスのつもりでチラリと言うのである。こちらも何を言われるかわかったものではない。

女房のイマイマシサがよくわかった。八百屋、魚屋、肉屋、酒屋、郵便屋、各種の集金人、勧誘員が来る。自分の買物、PTAの会合、親と子供の世話、動物のエサがある。炊事・洗濯・針仕事がある。

ひとつの家庭を守るのに要する神経と、その日常のやりきれなさ加減を私も理解したように思った。

〝ズボンのポケットにあいた小さな穴〟は男の言いぶんだろう。そのことは理解できる。しかし、そうかといって、ポケットの穴を私が自分で縫うというのもどうかと思われる。この穴ひとつが、エエ、ままならぬ。

わたくしの母

Gという友人とどういうぐあいに仲よくなったかについて話そう。Gとは、ある時期、非常に頻繁に往来したが、何かウスカワを一枚かぶっているような交際の仕方であった。

友人とは、会っていて抵抗感がなく、何日か会わないでいると落ち着かなくなり、相手を何等かの意味で尊敬していて、しかもある点に関しては軽蔑しているというふうでないといけない。

＊　＊

私の死んだ母には妙な癖があった。（死んだ母と書くときに変な違和感がある。なんだか変なのだ。ドギツイというのともちょっとちがうが、しっくりとこない。といって、私の亡くなった母と書くのも、なんだか憚りがあるように思われる。誰に対して、どう憚られるかがわからないが、申しわけないような気分になる。「死んだ母」と「亡くなった母」との中間にあたる言葉がないものか。「亡くなった母」と書くときは、世間様に申しわけないという気分になり「死んだ母」と書くときは〝汝、孝養を尽せよ〟という声がきこえてくるように思われる。「亡くなった母」と書くと、母が「お前さん、そりゃちがうよ」と言って出てきそうな気がする。母のことを書かないのはそのせいかもしれない。この連載で、父のこと、女房のこと、悴のこと、友人たちのことを書いてきた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.